# 令和四年度　第二学年　二学期中間考査　現代文

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある夜、一匹の小えびが岩屋の中へ（Ⅰ）まぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまっただなかにあるらしく、透明な腹部いっぱいにあたかもすずめの稗草の種子に似た卵を抱えて、岩壁にすがりついた。そうして細長いその終わりを見届けることができないように消えている触手を振り動かしていたが、いかなる了見であるか彼は岩壁から跳びのき、二、三回ほど巧みな宙返りを試みて、今度は山椒魚の横っ腹にすがりついた。

山椒魚は小えびがそこで何をしているのか、振り向いて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去ってしまったであろう。

「だが、この①身持ちの虫けら同然のやつは、いったいここで何をしているのだろう？」

この一匹のえびは山椒魚の横腹を岩石だと思い込んで、そこに卵を産みつけていたのに相違ない。さもなければ、何か一生懸命に物思いにふけっていたのであろう。

山椒魚は得意げに言った。

「くったくしたり物思いにふけったりするやつは、ばかだよ。」

②彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかえて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終わってしまった。それゆえ、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて、うしろに身を退かなければならなかったのである。

この騒ぎのため、岩屋の中ではおびただしく水が濁り、小えびの（Ⅱ）狽といっては並たいていではなかった。けれど小えびは、彼が③岩石であろうと信じていたこん棒の一端がいきなりコロップの栓となったり抜けたりした光景に、④ひどく失笑してしまった。全くえびくらい濁った水の中でよく笑う生物はいないのである。

山椒魚は再び試みた。それは再び（　A　）に終わった。なんとしても彼の頭は穴につかえたのである。

彼の目から涙が流れた。

「ああ神様！　あなたは情けないことをなさいます。たった二年間ほど私がうっかりしていたのに、その罰として、一生涯この穴蔵に私を閉じ込めてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂いそうです。」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであろうが、この山椒魚にいくらかその傾向がなかったとは誰が言えよう。⑤諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど⑥暗黒の浴槽につかりすぎて、もはや我慢がならないでいるのを、了解してやらなければならない。いかなる癲癇病者も、自分の幽閉されている部屋から解放してもらいたいと絶えず願っているではないか。最も人間嫌いな囚人でさえも、これと同じことを欲しているではないか。

「⑦ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二匹のみずすましが遊んでいた。彼らは小なるものが大なるものの背中に乗っかり、彼らは唐突な蛙の出現に驚かされて、直線をでたらめに折り曲げた形に逃げまわった。蛙は水底から水面に向かって勢いよく律をつくって突進したが、その三角形の鼻先を空中に現すと、水底に向かって再び突進したのである。

山椒魚はこれらの活発な動作と光景とを感動の瞳で眺めていたが、やがて彼は⑧自分を感動させるものから、むしろ目を避けたほうがいいということに気がついた。彼は目を閉じてみた。悲しかった。彼は彼自身のことを例えばブリキの切りくずであると思ったのである。

誰しも自分自身をあまり愚かな言葉でたとえてみることは好まないであろう。ただ不幸にその心をかきむしられるもののみが、自分自身はブリキの切りくずだなどと考えてみる。たしかに彼らは深くひとごろ手をして物思いにふけったり、手ににじんだ汗をチョッキの胴で（Ⅲ）ぬぐったりして、彼らほどおのおの好みのままの格好をしがちなものはないのである。

山椒魚は閉じたまぶたを開こうとしなかった。なんとなれば、彼にはまぶたを開いたり閉じたりする自由と、その可能とが与えられていただけであったからなのだ。

その結果、彼のまぶたの中では、いかに（Ⅳ）合点のゆかないことが生じたではなかったか！　目を閉じるという単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく広がった深淵であった。誰しもこの深淵の深さや広さを言いあてることはできないであろう。

――どうか諸君に再びお願いがある。山椒魚がかかる常識に没頭することを軽蔑しないでいただきたい。牢獄の見張り人といえども、よほど気難しい時でなくては、終身懲役の囚人がいたずらに嘆息をもらしたからといって叱りつけはしない。

「ああ、寒いほど（　X　）だ！」

注意深い心の持ち主であるならば、山椒魚のすすり泣きの声が岩屋の外にもれているのを聞きのがしはしなかったであろう。

問一　線部（Ⅰ）～（Ⅳ）のかなは漢字に、漢字はその読みをひらがなで記しなさい。

問二　線部①「身持ちの虫けら」とは、「何」が「どのような状態」であることをいうのか。次の空欄に合うように、文中の語句をそれぞれ五字以下で抜き出して答えなさい。

（　1　）が（　2　）いること

問三　線部②「彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した」のはなぜか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いつまでも小えびとともにいると、空腹感に負けて小えびを食べてしまうかもしれないと思ったから。

イ　小えびのように下等な生物といつまでも行動をともにしているのは、なんの得にもならないと思ったから。

ウ　空腹のため自分に残された力は僅かであり、冗談ごとを言っている場合ではないと気がついたから。

エ　狭い空間の中に自分のような体の大きなものがいると、小えびの産卵にはよくないと気がついたから。

オ　くったくしたり物思いにふけったりしている自分に気づき、行動を起こさねばならないと思ったから。

問四　線部③「岩石であろうと信じていたこん棒」とは何のことか。文中から抜き出して答えなさい。

問五　線部④「ひどく失笑してしまった」のはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　岩石だと思っていたものが、突然コロップの栓のように詰めたり抜けたりする意外で滑稽な光景を目前にしたから。

イ　あまり速い動きをしない山椒魚が、突然素早い動きで岩屋の出入り口に突進したり退いたりする動きがおもしろいから。

ウ　いつもいばっていて自分たちを見下している山椒魚が、岩屋から脱出できないでいるのをいい気味だと思ったから。

エ　他人の失敗や絶望する姿は、第三者から見れば「対岸の火事」であり、小えびにとっては無責任でいられることだから。

オ　静かな岩屋が山椒魚の思いがけない動きのためにぎやかになり、身重であるのを忘れ、浮わついた気持ちになったから。

問六　文中の空欄（　A　）に入る「無駄な骨折り」という意味の漢字二文字の熟語を答えなさい。

問七　線部⑤「諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない」とあるが、作者はなぜこのようなことを言うのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　読者に、苦悩する山椒魚を、人間とは関係のない下等な生き物のように片づけてほしくないから。

イ　読者に、発狂した山椒魚を、計画性のない愚か者として扱い、やたらに批判してほしくないから。

ウ　読者に、岩屋から出たがらない山椒魚を、夢のないつまらないやつと馬鹿にしてほしくないから。

エ　読者に、孤独な山椒魚を、誰にも理解されない寂しい知識人のようなものと見てほしくないから。

オ　読者に、岩屋から出られないで絶望する山椒魚を、諦めの早い人間と同一視してほしくないから。

問八　――線部⑥「暗黒の浴槽」とは何のことをいっているのか。文中から抜き出して答えなさい。

問九　――線部⑦「ああ神様、どうして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」とあるが、この時の山椒魚の気持ちとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　小えびの事情も考えず、岩屋の出口に突進を繰り返した乱暴な自分を責めている。
イ　善良な自分が罪を犯した囚人のような扱いを受けることを受け入れようとしている。
ウ　有意義な人生を送ることのできない運命に対するやり場のない怒りを覚えている。
エ　岩屋に閉じ込められて不自由な人生を送る自分の運命を、冷静に受け止めている。
オ　岩屋の中でさえも自由な生活を楽しめない不条理に、怒りを抑えきれないでいる。

問十　――線部⑧「自分を感動させるものから、むしろ目を避けたほうがいい」とあるが、その理由の説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　外の活発な活動や光景に感動するのは、自分の状況を再認識することにつながり、悲しみを増すことになるから。
イ　自分を感動させるものがいるのに、自分は誰をも感動させることはできず、自分の無力さにいらだちを覚えるから。
ウ　外の光景や他の生物に感動するのは、相手を批判し嘲笑している自分の立場に反することだと気がついたから。
エ　活発な動作や光景に感動しても空腹は満たされず、くったくや物思いをすることと変わらないと達観したから。
オ　みずすましや蛙の行動は、せいぜい僅かな時間のことで、いずれ大きな動物の餌になると思うとむなしいから。

問十一　文中の空欄（　X　）に入る言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　の水温　　イ　長時間　　ウ　の季節の移り変わり　　エ　独りぼっち　　オ　愚か

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

悲嘆にくれているものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚は①よくない性質を帯びてきたらしかった。そしてある日のこと、岩屋の窓から紛れ込んだ一匹の蛙を外に出ることができないようにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となったので、狼狽のあまり岩壁によじのぼり、天井に跳びついて銭苔のうろこにすがりついた。この蛙というのはよどみの水底から水面に、水面から水底に、勢いよく往来して山椒魚を羨ましがらせたところの蛙である。誤って滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党が待っている。

山椒魚は相手の動物を、自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であったのだ。

「一生涯ここに閉じ込めてやる！」

悪党の呪い言葉はある期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりでくぼみに入った。そして彼は、これでだいじょうぶだと信じたので、くぼみから顔だけ現して次のように言った。

「俺は平気だ。」

「出てこい！」

と山椒魚はどなった。そうして彼らは激しい口論を始めたのである。

「出ていこうといくまいと、こちらの勝手だ。」

(A)「よろしい、いつまでも勝手にしろ。」

「おまえはばかだ。」

「おまえはばかだ。」

彼らは、かかる言葉を幾度となく繰り返した。翌日も、その翌日も、②同じ言葉で自分を主張し通していたわけである。

一年の月日が過ぎた。

初夏の水や温度は、③岩屋の囚人たちをして④鉱物から生物によみがえらせた。そこで二個の生物は、今年の夏いっぱい次のように口論し続けたのである。山椒魚は岩屋の外に出ていくべく頭が肥大しすぎていたことを、すでに相手に見抜かれてしまっていた。

「おまえこそ頭がつかえて、そこから出ていけないだろう？」

「おまえだって、そこから出てはこれまい。」

「それならば、おまえから出ていってみろ。」

「おまえこそ、そこから降りてこい。」

更に一年の月日が過ぎた。二個の鉱物は、再び二個の生物に変化した。けれど彼らは、今年の夏はお互いに黙り込んで、そしてお互いに自分の嘆息が相手に聞こえないように注意していたのである。

ところが山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。それは「あああああ。」という最も小さな風の音であった。去年と同じく、しきりに杉苔の花粉の散る光景が彼の嘆息を唆したのである。

山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかった。彼は上の方を見上げ、かつ友情を瞳に込めてたずねた。

「おまえは、さっき大きな息をしたろう？」

相手は自分を鞭撻して答えた。

「それがどうした？」

「そんな返事をするな。もう、そこから降りてきてもよろしい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もうだめなようか？」

相手は答えた。

「もうだめなようだ。」

よほどしばらくしてから山椒魚はたずねた。

「おまえは今、どういうことを考えているようなのだろうか？」

相手は極めて遠慮がちに答えた。

(B)「今でもべつにおまえのことを怒ってはいないんだ。」

問一　――線部①「よくない性質」とあるが、その一例となる部分を「～を喜ぶ。」に続くように、本文中から二〇字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を示しなさい。

問二　――線部②「同じ言葉で自分を主張し通していた」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　口論の相手に対し何度でも言葉をぶつけ合うことでしか、自分の存在意義を確かめる方法はないということ。
イ　口論の相手に対しいろいろなことを言いたいところだが、表現力が乏しいために同じ言葉しか出てこないということ。
ウ　口論の相手に対し友情を感じ始めており、優しい言葉をかけてあげたいところだが、素直には言えないということ。
エ　口論の相手に対し不満をぶちまけたいと思っているが、感情的になるあまり、単調な口のきき方になるということ。
オ　口論の相手に対し繰り返し同じ言葉を投げかけることで、少しずつ精神的打撃を与えようとしているということ。

問三　(A)「よろしい、いつまでも勝手にしろ。」、(B)「今でもべつにおまえのことを怒ってはいないんだ。」の発言は、それぞれ誰のものか。文中の語で答えなさい。

問四　――線部③「岩屋の囚人たち」とは、誰のことか。文中の語で答えなさい。
問五　――線部④「鉱物から生物によみがえらせた」とは、どういうことか、簡潔に説明しなさい。
問六　次の空欄A～Eに当てはまる言葉を、後の語群からそれぞれ一つずつ選べ。

「山椒魚」の作者【　A　】は、庶民や【　B　】を登場人物として、人間社会の矛盾について、独特の感覚と【　C　】をもって風刺的に描いた。その作品には、郷里【　D　】に落とされた原爆がそこに生きる人々の生活にどのような影響を与えたかを描いた【　E　】などがある。

ア　井伏鱒二　　イ　貴族　　ウ　リアリズム　　エ　広島　　オ　「黒い雨」
カ　夏目漱石　　キ　動物　　ク　ユーモア　　ケ　長崎　　コ　「夏の花」

【三】次の例文のカタカナ、ひらがなを適切な漢字に改めなさい。（10点）

①古いテンポを改装する。　②シボウの多い食品を控える。　③マンセイ的な水不足に悩む。
④目が回るほどいそがしい。　⑤獣を素手でつかまえる。　⑥幼い頃にドウヨウを歌った。
⑦夜空にワクセイを探す。　⑧コウレイ化社会の対策を施す。　⑨モウレツな空腹感をおぼえる。
⑩日本車の品質はおとっていない。

【四】和歌に関する問題

A　春のa苑紅bにほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ　エ
B　袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ　ク
C　ほのぼのと春こそ空に来にけらしc天の香具山霞たなびく　カ
D　春過ぎて（　1　）d白妙の衣乾したり天の香具山　オ
E　暮るるかと見れば明けぬる夏の夜を飽かずとや鳴く山ほととぎす　イ
F　e橘のにほふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする　キ

問一　～～線a～eの読み方を、現代仮名遣いで答えなさい。

問二　和歌A～Fの作者を次のうちからそれぞれ選びなさい。

ア　壬生忠岑　　イ　天智天皇　　ウ　藤原俊成女　　エ　大伴家持　　オ　持統天皇　　カ　後鳥羽院
キ　藤原定家　　ク　紀貫之

問三　和歌Bについて、後の問いに答えよ。

(1)「袖ひちて」とはどういう意味か。適当なものを次から選び記号で答えなさい。

ア　袖をまくり上げて　　イ　袖が濡れるままに　　ウ　袖を結んで　　エ　袖をひきちぎって

(2)「春立つ」の意味として適当なものを次のうちから選びなさい。

ア　春が終わる　　イ　門出を迎える　　ウ　春になる　　エ　春のような

(3)「春」「立つ」はそれぞれ掛詞となっている。それぞれ適当なものを次のうちから選びなさい。

ア　晴る　　イ　張る　　ウ　瞬　　エ　旬　　オ　辰　　カ　建つ　　キ　裁つ　　ク　絶つ

(4)(3)の他に、「むすぶ」「解く」といった語は、すべてある語の縁語として用いられている。何の縁語であるか、和歌中から抜き出しなさい。

問四　和歌Cは何句切れか答えよ。

問五　和歌Dの空欄（　1　）を埋めなさい。

問六　和歌Dには「体言止め」という技法が使われている。この歌の他に「体言止め」が使われている歌をA～Fの中からすべて選び、記号で答えなさい。

問七　和歌Eの傍線部「暮るるかと見れば明けぬる夏の夜を」とは、「夏の夜」のどういう状況を表しているのか。簡潔に答えなさい。

問八　和歌Fは「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」という歌を念頭に作られている。このように以前に詠まれた歌を取り入れる技法を何というか答えなさい。

問九　『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』のうち「勅撰和歌集」であるものを答えなさい。また「勅撰」の意味として適当なものを次のうちから選びなさい。

ア　最も良いものを選んだ　　イ　天皇の命令で選んだ　　ウ　今後参考とすべき　　エ　奈良時代のものを選んだ

令和四年度　第二学年　二学期中間考査　現代文

組　　番　氏名（　　）

【一】 38

問一　Ⅰ 紛れ　Ⅱ ろうばい　Ⅲ 拭ったり　Ⅳ がてん

問二　1 小えび　2 卵を抱えて　問三 オ

問四　山椒魚（の横っ腹）　問五 イ　問六 徒労

問七　ア　問八 岩屋（の中）　問九 ウ　問十 ア　問十一 エ

問一　2×4　問二は両方できて3　問三〜十一は3

【二】 22

問一　相手の動物〜に置くこと　問二 ア

問三　A 山椒魚　B 蛙　問四 山椒魚と蛙

問五　冬眠から目覚めさせたということ（低温のために動きの鈍っていた二匹を活動的にさせたということ）

問六　A ア　B キ　C ク　D エ　E オ

問一・二・四は3　問三 2×2　問五 4　問六 1×5

【三】

| | |
|---|---|
| ① 店舗 | ② 脂肪 |
| ③ 慢性 | ④ 忙（しい） |
| ⑤ 捕（まえる） | ⑥ 童謡 |
| ⑦ 惑星 | ⑧ 高齢 |
| ⑨ 猛烈 | ⑩ 劣（って） |

【四】

各1　各2

問一　a その　b におう　c あ（め）（は）のかぐやま　d しろたえ　e たちばな

問二　A エ　B ク　C カ　D オ　E ア　F ウ

問三　(1) イ　(2) ウ　(3)「春」イ　「立つ」キ　(4) 袖

問四　三句切れ

問五　夏来たるらし

問六　A、ニ

問七　短かざ

問八　本歌取り

問九　古今和歌集、新古今和歌集

意味　イ

30